

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530663

研究課題名(和文)シンガポールにおける「国民」文化の生成に関する社会学的研究

研究課題名(英文)A Sociological Study of the Formaton of "National" Culture in Singapore

研究代表者

鍋倉 聡 (Nabekura, Satoshi)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：50346011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：シンガポールは、1965年の独立から50年に満たない上、植民地時代以来「多人種主義」の下、華人・マレー人・インド人・その他という四つの人種に分割されているという、国民文化の生成が困難な条件をそろえている。こうした中、国民文化は生成し得るのか。本研究では、敢えて「国民」文化とした上で、その生成をめぐる国家と国民の間様々なせめぎ合いの諸過程を、総団地化社会の成立と団地文化の生成、ホーカー(屋台)センターという独自の飲食空間の生成と取り壊し、国民的モニュメントの生成と取り壊し、シンガポール独自の言語、シンガポール華人と中国人の関係という五点を取り上げ、現地調査に基づいて明らかにすることを試みた。

研究成果の概要(英文)：Singapore has less than fifty years of history since its independence in 1965 and has been divided by four races of Chinese/Malay/Indian/Others under Multiracialism since the colonial era. Under such conditions where national culture has some difficulty to develop, is it possible to grow it up? In this study, I dare to use the term of "national" culture and examine and reveal the processes of its development through the interaction between nation and state. For this purpose, I have conducted field research there and examined the five topics as follows: (1)Formation of the society where most of all Singaporeans must live in the flats built by the government and the habitat culture to live there. (2)Formation of the distinctive eating places of Hawker Centres and their reformation and demolition. (3)Formation of national monuments and their demolition. (4)Development and suppression of the distinctive languages in Singapore. (5)Relations between Chinese Singaporean and Chinese National.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：社会学 シンガポール アジア社会 国民文化 国民国家 ナショナリティ エスニシティ 多人種社会

1. 研究開始当初の背景

(1) シンガポールの国民文化をめぐる背景

シンガポールは、英国植民地時代に分割統治によって複合社会とされて以来、敢えて「人種」という語を用いることによって、華人、マレー人、インド人、その他という人種別に分断される多人種社会を形成してきた。1963年にマレーシア連邦に加わる形で独立したが、マレー人対華人という人種対立を最大の理由に、1965年に意図しない形で単独の共和国として独立した。シンガポールは、国民文化の生成が困難な条件をそろえてきたと言える。

1965年の独立以降、シンガポール政府は、一方でシンガポール人意識や国民文化を育成する必要性を唱えてきた。このことは、あらゆる国民国家が行なっていることであり、改めてシンガポールを対象に研究することではない。シンガポールで特徴的なのは、「多人種主義 (Multiracialism)」の下、他方で植民地時代以来の人種別の分断を利用し、国家による国民の分断を同時に行なうことによって、一元管理社会を築いてきたことである (鍋倉聡、2011、『シンガポール「多人種主義」の社会学：団地社会のエスニシティ』、世界思想社)。

こうした中、シンガポールの人々が、政府の意図する方向とは必ずしも一致しない方向に向けて国民文化を生成し、国民文化が生成していく可能性はないのであろうか。このことを明らかにする方法の一つとして挙げることができるのは、国家と国民の様々なせめぎ合いについて、敢えて国民に注目することで、現地調査を基に社会学研究を行なうことである。

(2) 研究の学術的背景

1965年の独立後、シンガポール政府によって国民文化の育成と人種別分断とがともに行なわれてきたことについては、人種別差

異の扱いにおける二面性として、政策研究を中心に研究されてきた。しかし、いかに並存しているのか、という現地の人々の視点に立った社会学研究については、1980年代以降十分に行なわれてきたとは言えない。その要因として、1980年代半ば以降、人口の80%以上が、HDB (Housing and Development Board = 住宅開発庁) の下にある団地に暮らさなければならない総団地化社会が実現し、住民を対象とする社会学研究の実施が、当局によるチャンネル以外に困難になってしまったことを挙げるができる (同)。

こうした中、筆者はこれまで、敢えて団地で現地調査を行ない、それをもとに、両者の並存について社会学研究を進めてきた。ここでは、団地において住民が人種別に分断されるだけでなく、団地という共通の居住環境を共用し、人種を問わない方向に展開し得ることを示した。しかし、こうした可能性を有するがゆえに、格好の解体の対象にもなり、団地再開発による団地の取り壊しとして広く行なわれてきたことを明らかにし、展開と解体をめぐる両者のせめぎ合いについて、団地の取り壊しと絡めて、各団地レベルで明らかにして単著にまとめた (同)。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、国民国家、ナショナリティ、エスニシティに関する社会学研究の発展に寄与するべく、各団地の個別レベルで行なってきた筆者のこれまでの研究対象をシンガポール全国に広げ、国民文化が、一元管理国家の実現を目指す政府の志向とは異なる方向で独自に生成し得ると同時に、格好の抑圧の対象にもなり、このことがまた生成をもたらす契機となっていることをシンガポールの全国レベルで示すことで、国民文化の生成をめぐる、国家と国民の間のせめぎ合いの諸過程を明らかにすることを目的とした。

シンガポール研究において、国家側からのアプローチが中心を占める中、本研究では、国民側からのアプローチも試みるため、次の五点を取り上げて研究を進めた。

(1) 総団地化社会の成立と団地文化の生成を通して。

(2) ホーカー（屋台）センターという独自の飲食空間の生成とその取り壊しについて。

(3) 国民的モニュメントの生成と取り壊しをめぐって。

(4) シンガポール独自の言語をめぐって。

(5) シンガポール華人と中国人の関係について。

3. 研究の方法

1945年から1970年代までの生成及び定着過程を中心とする文書資料の収集と、解体を含めた現況に関する現地調査を中心に研究を行なった。

シンガポールでは、2011年8月～9月、12月、2012年8月、2013年8月に現地調査を行なった。その際には、筆者が1998年以来築いてきた現地調査のネットワークを最大限活用することで、一元管理社会において社会学研究を進めるという難題を実現した。筆者がこれまで特定の団地に集中して行ってきた研究を、シンガポール全国を対象を広げることで、研究を発展・深化させた。

本研究の有力な資料となったシンガポールの現地紙を収集するにあたっては、シンガポールの現地機関よりも日本国内のアジア経済研究所図書館の方が設備が優れていることが研究の過程で明らかになったので、そこへ頻りに赴いて資料収集を行なった。

また、本研究は、共同研究として行なう性質のものではないため、筆者単独で行ない、研究協力者等は置かず筆者が研究代表者として研究全般を担当して行なった。

4. 研究成果

シンガポールにおける国民文化の生成のについて、本研究では、その生成をめぐる国家と国民の間のせめぎ合いの諸過程を示すべく、以下の五つの点を検討した。

(1) 総団地化社会の成立と団地文化の生成を通して

総団地化社会が成立するまでの文書資料の収集と、解体を含めた現況に関する現地調査を中心に研究を進めた。

シンガポールの団地開発は、英国植民地時代に事実上団地当局の役割を担った SIT (Singapore Improvement Trust = シンガポール改良信託) によって、1932年から始まった。SITはティオンバル団地やクイーンズタウン第一近隣区のプリンセス団地など様々な団地を建設した。

1960年にSITを引き継いだHDBは、基本的に都心部から同心円状に広がる形で団地開発を進めた。1960年代にはクイーンズタウンやトアパヨといった都心から5マイル(=約8キロメートル)の範囲内で団地開発を進め、1970年代にはその外側のアンモキオ、ベドック、クレメンティで団地開発を進めた。1980年代に団地開発はさらにその外側に広がり、1990年代以降は国中が団地化され、総団地化社会が成立した。各年代別の団地の特徴を大まかに記すと、1960年代に建設された団地は、ごく一部を除いて、三部屋型以下の間取りの小さいものしかなかった。1970年代の団地は、四部屋型以上の大きな間取りの団地戸が現われる中、大量生産時代を迎え、団地のデザインはより画一化した。1980年代には、団地の個性化が唱えられ、敢えて屋根をマレー人建築風や華人建築風にするといった細工が施されるようになった。1990年代以降は、総団地化社会の成立と同時に、本格的に団地再開発の時代を迎え、土地の有効活用が唱えられるようになり、40階建てや50階建ての超高層団地棟が建設

され、各戸の間取りはむしろ縮小されるようになった。こうした中、異彩を放つのが、SITが建設した団地であった。その多くが取り壊された中、ティオンバル団地などで、SIT団地の個性的な姿を今なお見ることができる。

以上記した形で総団地化社会が成立する中、団地当局と住民との間のせめぎ合いが重要であり、こうしたせめぎ合いを通して、人種共通の団地生活スタイルが確立したことが、シンガポールにおける国民生活のスタイルの確立と結びつくことで、国民文化の生成にとって重要であることが分かった。さらにまた、団地という共通の居住環境を共用することで、人種別四分割によって区別され得ない、団地文化が生成しつつある一方、その生成が抑制されていることも明らかになった。このほか、その原型として、植民地時代に団地当局の役割を事実上担った、HDBの前身機関であるSITが重要であることも分かった。

以上のせめぎ合いの諸過程を示すべく、収集した資料を現在まとめている最中であり、これらの資料をもとに、その成果を学会発表及び論文として公表していく準備を進めている。また、ここで収集しまとめた資料は、次の科研費研究の基礎資料としても活用していく。

(2) ホーカーセンターという、シンガポール独自の飲食空間の成立とその取り壊しをめぐって

シンガポールでは、ホーカーセンターという独自の飲食空間が形成され、シンガポール独自の飲食文化を育む場となってきたと同時に、格好の再編と取り壊しの対象にもなってきた。

本研究では、このホーカーセンターについて、フィールドワークと文書資料の収集を中心に研究を行ない、ホーカーセンターをめぐる国家と国民のせめぎ合いを検証した。

フィールドワークでは、シンガポールに現

存する112ヶ所全てのホーカーセンターを対象に研究を進めた。その結果、ホーカーセンターが、公私がせめぎ合う非常に興味深い社会空間である一方、それゆえに格好の再編と取り壊しの対象になっていることが明らかになった。

文書資料の収集では、かつてシンガポールのいたるところにあった路上屋台を全廃し、ホーカーセンターへ移し、ホーカーセンターとして定着するまでの様々なせめぎ合いの過程が明らかになった。

現在、収集した資料をまとめている最中であり、これらの資料をもとに、その成果を学会発表及び論文として公表していく準備を進めている。

(3) 国民的モニュメントの取り壊しをめぐって

シンガポールでは、国民文化が形成しかけると国家によって抑圧が加えられてしまう。このことを端的に示すのが、かつては国立劇場の取り壊しであり、近年では国立図書館の取り壊しであった。あるいは、「フォーファースハウス」や「オウトラムパーク」といった重要な団地棟もことごとく取り壊されてきた。こうした「国民的モニュメント」の取り壊しとシンガポール人の反応を全国的に明らかにすることを通して、国民文化をめぐる国家と国民のせめぎ合いを検証した。

文書資料の収集を行なったほか、シンガポールの人々に対して広く聞き取り調査を行なった。その結果、1965年にシンガポール共和国として独立する以前の様々な出来事が、シンガポールの独立後、シンガポールという国民国家が成立するにあたって重要なことが明らかになった。このことは、国立劇場や国立図書館が、1965年以前に建設されたことから分かる。そして、国立劇場や国立図書館が、シンガポール人に人種を問わず愛されながらも取り壊されてしまい、取り壊

された今なお、これらへの愛着をシンガポール人が人種を問わずに述べていることが興味深い。

(4) シンガポール独自の言語をめぐって

シンガポールでは、様々な言語背景をもつ者が生活を共にする中で、英語をもとに様々な言語を取り入れた「シングリッシュ」という独自の英語を発展させてきた。シングリッシュは、貴重な共通言語として重要な価値を有する一方、それゆえに政府の「よい英語を話そう」キャンペーンによって、国家権力を行使した格好の是正の対象となっている。シンガポールで用いられる華語も、1979年に始まった「華語を話そう」運動の下で、まさに国を挙げて促進される一方、中国大陸の中国語とは大きく異なった独自の展開を示し、これもまた是正の対象となっている。こうした言語について、その発展と是正をめぐるせめぎ合いを検証した。

(5) シンガポール華人と中国人の関係

シンガポールでは現在、中国大陸から移民を大量に受け入れている。多人種主義によって華人＝中国人であることを前提にしていたのだが、このことが逆に、華人＝中国人であるという意識を現地華人及び中国人の双方に生じさせ、意図せざる結果としてシンガポール人意識を現地華人に高め、むしろマレー人やインド人の方が自分たちに近いという意識さえ生じる結果ともなり得ている。意図せざる結果としてシンガポール人意識が高まることは、国民文化の生成に結びつくのだろうか。本研究では、中国人及び中国という外的要因からも国民文化の生成について検討を進めた。

(6) 本研究のまとめと課題

本研究では以上、1945年から1980年代までの国民文化の生成及び定着過程を中心と

する文書資料の収集と、解体を含めた現況に関する現地調査を中心に研究を行なった。

(1) から (5) までの5つの点を検討することを通して、シンガポールにおける国民文化の生成をめぐり国家と国民のせめぎ合いを明らかにした。中でもシンガポールの国民文化の生成にあたっては、(1) 団地と(2) ホーカーセンターがとくに重要であることが分かった。また、シンガポール共和国が成立する1965年以前の過程も重要であることが分かった。

以上のせめぎ合いの諸過程を示すべく資料のまとめと分析を行なっているが、まとめるのに時間がかかっており、当初予定の最終年度中での論文としての公表には至らなかった。国民国家、ナショナリティ、エスニシティに関する社会学研究への還元を果たすべく、その成果を一刻も早く公表することが、本研究の課題として残されている。

現在行なっている資料のまとめと分析を早急に完了し、その成果を一刻も早く公表していく。また今回収集した資料は、シンガポールの団地に関する次の科研費研究の課題(シンガポールにおける「総団地化社会」の成立と成立後の諸過程に関する社会学的研究)にもつながる基礎資料となるので、今後の研究にもつなげていく。

5. 主な発表論文等

〔その他〕

1. 鍋倉聡、「HDB 団地：団地社会に生きなければならない人々」、田村慶子編著『シンガポールを知るための65章(第3版)』26章、2011年、p147-152、明石書店

2. 鍋倉聡、「アジ研図書館で、シンガポールの戦後史を深く旅する」、『アジ研ワールド・トレンド』213号、2013年、p44、日本貿易振興機構アジア経済研究所

6. 研究組織

(1)研究代表者

鍋倉 聰 (NABEKURA, Satoshi)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号： 5 0 3 4 6 0 1 1